

ある方のおばあちゃんが入院をしました。

年齢は当時八十代後半。以前から心臓の持病があり、畑に出て仕事をしては何度も発作を起こして倒れていた<sup>な</sup>ので、亡くなる時は心臓でポックリ<sup>ゆ</sup>逝くのだろうと、本人も家族も笑いながら話していたそうです。

しかし、入院時の病名は「脳<sup>のうこうそく</sup>梗塞」。蒲団から立てずに、呂律<sup>ろれつ</sup>がまわらないで訴えるのを、寝ている弟が気づいて家族に知らせました。入院の準備などでバタバタする家族に代わり、孫であるその方は生まれて初めて救急車におばあちゃんと乗りました。

その日から家族の生活は一変しました。介護保険制度ができる前の時代。母親は朝一番で病院へ向かい、父親が慣れない朝ご飯をつくり、孫は洗濯物を干す。すべてがおばあちゃんの看病優先の日々になりました。

結局、その方のおばあちゃんは四年間入院したまま、だんだんと弱っていき亡くなりました。悲しいとか、もう少し長く生きてくれたらなどの気持ちはありましたが、家族としてこの四年間に悔いはなかったそうです。

おばあちゃんの病は、さまざまな事を教えてくれました。入院をする以前の事、心臓の発作が続いた時に枕元に孫二人を呼び、それぞれに説教のような、遺言のような話をしました。

「お前は真面目に勉強をして長男として兄弟の面倒をみなさい。」「お前はふざけてばかりではいけません。おばあちゃんは見ているからね。」など。病気である事実を受け入れ、自分の最後の思いを孫に伝えたのだと思います。

また、家族に面倒をかけずにポックリ逝きたいと話していた<sup>さ</sup>そうですが、四年間ベッドの上で家族の介護を受けるとい、本人が一番避けたい<sup>さ</sup>と思っていた形になりました。

仏教では、人間が思うままにならない根本的な苦しみを「生<sup>しょう</sup>・老<sup>ろう</sup>・病<sup>びょう</sup>・死<sup>し</sup>」の「四<sup>し</sup>苦」といいます。その一つ「病<sup>びょう</sup>」、つまり病<sup>やまい</sup>は、この先人類が叡智<sup>えいち</sup>を尽くしても無くならないものだと考えられます。

その方は、おばあちゃんの病気を通して、病<sup>やまい</sup>は思い通りにならないものであり、また、人に面倒をかけずに生きる事はできないという事実に気づいたのです。

だからこそ、思い通りにならず、逃れることのできない病<sup>やまい</sup>の中でどのように自<sup>みすか</sup>らの身を処<sup>しよ</sup>してゆくのが問われるのだと思います。